NPO 法人 純正律音楽研究会会報　～2024 年 5 月発行～

ひびきジャーナル

〒169-0073　東京都新宿区百人町 4-4-16-1218　Tel:03-5389-8449
Fax:03-5389-8449　e-mail:puremusic0804@yahoo.co.jp

発行日　2024 年 5 月 10 日
発行責任者 NPO 法人 純正律音楽研究会
編集　相坂政夫

No.79

青葉を吹き渡る快い風が吹く頃となりましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

さて、玉木宏樹が作曲しました「大江戸捜査網」のテーマ曲が、映画「もしも徳川家康が総理大臣になったら」の楽曲に使用されることになりました。

出演者、最強内閣の動向を記者として見守る主人公・西村理沙を演じるのは、浜辺美波。現代人との架け橋である内閣官房長官を任された幕末の風雲児・坂本龍馬役には赤楚衛二。そして、注目の内閣総理大臣・徳川家康を野村萬斎が務める。さらに、斬新な発想力と圧倒的カリスマ性を持ち、威圧感溢れる経済産業大臣・織田信長を GACKT。空前の成り上がり者で、プロデュース力に優れた財務大臣・豊臣秀吉を、竹中直人が演じる。さらに、農林水産大臣・徳川吉宗（高嶋政宏）、総務大臣・北条政子（江口のりこ）、厚生労働大臣・徳川綱吉（池田鉄洋）、外務大臣・足利義満（小手伸也）、法務大臣・聖徳太子（長井短）、文部科学大臣・紫式部（観月ありさ）など。

2024 年 7 月 26 日（金）公開になります。ご覧いただければ幸いです。
玉木宏樹の意思を継いで「純正律音楽」の普及に邁進していきたいと思っております。

今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

94 歳のヴァイオリニスト

洗足学園音楽大学客員教授・ヴァイオリニスト
NPO 法人 純正律音楽研究会 代表
水野佐知香

90 歳代の音楽家で演奏活動をされている方々がいる。N 響などで指揮を振っている指揮者のヘルベルト・プロムシュテット 96 歳、先日亡くなられたフジコ・ヘミングさん 92 歳、そして、日本のヴァイオリニスト小林武史先生 94 歳！
プロムシュテットさんは、ついこの間まで日本にもよくいらして菜食主義を貫き、とてもシャキッとして素晴らしい姿勢で指揮をされていました。フジコ・ヘミングさんはご逝去される 2024 年までコンサートの予定が入っていたようです。そして、先日 94 歳になられた小林武史先生が銀座王子ホールでリサイタルを開催されました。腰が痛くて立って演奏できないので椅子に座わられての演奏でした。満員のお客様（私の隣の方は 94 歳の女性でした）長年のファンの方々でいっぱいでした。
ピアノは作曲家でピアニストで東京音楽大学学長の野平一郎さん！
　プログラムは、
ヤナーチェク／ヴァイオリンとピアノのためのソナタ
ヤナーチェク／ドゥムカ
夏田鐘甲／ヴァイオリンとピアノのためのバラードよりⅡ 祈り
伊福部昭／ヴァイオリンとピアノのためのソナタ

楽器を持たれた瞬間にスイッチが入り、音楽の真髄が聴こえてきます。難しいリズム、その曲の音楽の心を身体が覚えられてるのだと思います。とにかくすごい！すぐその後に読売交響楽団と團伊玖磨先生ののファンタジアを弾かれました。私は伺えなかったのですが、とにかく最初のオーケストラが音を出したすぐ、「リズムが違う」とオーケストラを止められたそうです。このファタンジアは暗譜でひかれたそうです。ヴァイオリニストの川田知子さんが付き添っていましたが、楽屋に帰った瞬間「今日は何か弾いたの？何があるの？」との会話。びっくりです。本当にヴァイオリンを持たれた瞬間にお爺ちゃまがヴァイオリニストになられます。
　日本人がヨーロッパに出るには、日本人が作曲をされた曲を持って外国に出るべき！と先生自ら作曲家に依頼して曲をたくさん書いていただいています。外国に行くと、日本の曲を演奏してほしい!と言われることが多く、あるピアニストは、お三味線を習い持ち運び、ついにお三味線のお師匠さんになられた方もいるくらいです。自国を愛し、日本の独自の曲を持たなくてはならない!と考え、実行されたこと!本当に素晴らしいです。そして 94 歳の今もなお弾き続けられること！本当に凄い!！
　そして、ハーピストの三宅美子さんが、5 年前からイタリア語を勉強され、遂にイタリアに約一月いらして、先ほど帰国されました。お料理に、ワインに映画に、素晴らしい経験をされました。トランジットをされたドバイでの 3 時間

も寸暇を惜しまず、イタリア語の勉強をされていたそうです。継続と努力は力なり！本当に素晴らしいことだと頭が下がります。
また、旅行記を書いていただきたく考えています。、とても楽しみ、、、、！
そして良い先生に巡り合うことが大切だと思います。
　話は変わりますが、私は表参道にある美容室に 10 年ほど通っていますが、彼がカットしてくれたあとは、何も髪につけませんが、ツルツル、てかてかなのです。方向など切り方があそうで、最初の先生が素晴らしかった、そのあともちろん研究しましたが!と話をしてくれました。良い先生に習えること!これは楽器の世界も一緒で、相性はもちろん、先生との出会いは大切だとつくづく感じました。そのあとは研究、努力、そして続けること❣️
　さあ!楽しんで勉強しなくては！

ムッシュ黒木の純正律講座　第 78 時限目
平均律普及の思想的背景について(67)
純正律音楽研究会理事　黒木朋興

　美しいか否かは、主観的な判断あるいは個人的な感想の範囲を出ないのであろうか、それとも客観的な基準があるのだろうか？
　以前のヨーロッパでは神が基準として機能していた。美しいことだけではなく、正しいことも善いことも全て神を基に判断されていたのである。もちろん、実際に判断を司っていたのは神自身ではなく教会であった。このような社会においては、人々がいかに感動したかではなく、聖職者たちの判断によって美が定められていた、つまり美は権威に依拠していたと言っても過言ではないであろう。
　ところが、神中心の社会から近代の人間中心の民主主義社会に移行する中で、人々がそれぞれの心の中でどのように美しさを感じるか、という具合に個人の内面に照明があたるようになった。内面の判断というと、近代の父ルネ・デカルトのコギトが有名であるが、近代美学の誕生に大きく寄与したのはむしろドイツ観念論だろう。主観的な美しいという判断に客観的なお墨付きを与えようとして論理を組み立てたのが近代美学の功績なのである。
　以下、しばし主観と客観の議論をしてみたい。近代以前のヨーロッパでは、主観／客観の意味は現在と大きく異なっていた。現在では主観は個人の感想であって、客観は万人が認めることのできる事実という意味で使用されている。「一本の長い棒がある」
という発言があった場合、その棒が長いと感じるのはその人の判断に過ぎず、同じ棒を見て「短い棒」と見なす人もいるだろう。これらは主観的な評価ということになる。対して、「1 メートルの棒がある」と言う時、この棒は測定が正しければ誰が見ても 1 メートルであり、客観的な評価と言える。この場合、メートル法による定規が客観的な基準を与えていることになる。
　ある音楽が美しいかどうか、という判断に対して、メートル法のような明確な尺貫法があれば話は簡単だろう。この音楽は 2 メートルを超えているから十分美しいと言えるとか、この音楽が美しくあるためにはあと 5 センチ足りないというような評価が可能になるからだ。もちろん、実際はこのような物差しはないので、すべて評価を主観に委ねるとすると、美は人の数だけあ

ることになり、万人に共通の美はあり得ないのではないのだろうかという疑問が生じることになる。

ところが、近代以前における主観／客観の意味は、大雑把に言えば、上記のものとは逆であったと言える。この時代においては美の基準が神であったことを再度確認しておきたい。神に通じているものが美や正義で、神から遠いものが醜や不正義なのだ。主観＝主語（subject）が理性的な思考をするとすれば、その理性は神から与えられたとされるのでその判断は正しいとして良い。対して、客観＝理性が知覚する対象（object）は物体なので自ら思考することはない。つまり理性はないことになり、神からはかけ離れていることになる。なので、客観（object）は美を決める基準足り得ない。

このように神あるいは教会という権威が美しいかどうかを決めてくれるのであれば、議論は簡単だが、ヨーロッパ社会は神から脱却し人間だけの手で社会を構築しようという民主主義の時代に突入した。このような状況下、人々の主観的な美しいという判断を集め、その中から共通する原理なり基準なりを構築しようとしたのが、近代美学なのであり、近代民主主義社会を発展させるために極めて重要な作業であったのである。

クラシック埋蔵金・発掘指南書(その 1)

純正律音楽研究会 初代代表
玉木宏樹遺作

1. 埋蔵金さがしの旅に出よう。

*もうドイツの 3 大 B はアキアキだ!

いま、「埋蔵金」という言葉が飛び交っています。もちろん国会周辺なんですが、それだけではなく、インディ・ジョーンズの次の狙いは「徳川埋蔵金だ」なんていう冗談も生まれています。さて、我々はクラシック埋蔵金さがしの旅に出ようとしているのですが、果たして埋蔵金はあるのでしょうか、あるとすればどこにあるんでしょうか? そもそも埋蔵金というのは見つかりそうにない所に隠すものですが、クラシックの場合も誰かが隠したんでしょうか。そんなことはあるはずがありませんが、そもそも埋蔵金なんてあるはずがないと思い込まされ、見えないように大きな目隠しをされているのは間違いないと思います。それがドイツの 3 大 B 神話です。

3 大 B というのは、みなさんご存知の通り、バッハ、ベートーヴェン、ブラームスの頭文字、B を指して言います。バッハは「音楽の父」だし、ベートーヴェンの「第九」は「人類不滅の金字塔」、そしてブラームスはベートーヴェンの後継者で「絶対音楽」を確立した人と言われています。もし文字通りならば、誰もが頭(こうべ)を垂れ、ひれ伏さねばなりません。事実、クラシック・ファンを自称する人の殆どは、水戸黄門の印籠のように 3 大 B という言葉の前にひれ伏し、年末の第九は大盛況で、浅草の奥様社中まで、原語で合唱したりします。しかしよく考えてみて下さい。こんな状態を変だと思う人はいないのでしょうか。バッハが「音楽の父」なら、それ以前の音楽家は何だったんでしょうか。

バッハは生存中、厳格な教師として、有名でしたが、作品は一向に有名にならず、誤訳で有名な「平均律クラヴィア曲集」が出版されたのは死後 50 年以上

たってからです。また彼の代表作として有名な「マタイ受難曲」が復活演奏されたのは、死後 79 年たってからで、その時代をへだてた高い音楽性に驚いたドイツ人が勝手に「音楽の父」と言い出し、あきれたことにバッハと同じ年のヘンデル(帰化している立派なイギリス人)までドイツの音楽家として引っ張り出し、その上「音楽の母」などと称します。おかげでヘンデルは女性だったと誤解している人もいるんではないでしょうか。

私はこの 3 人の中ではバッハは好きな所もあり、自分のミニ・コンサートの冒頭は大抵バッハ・無伴奏ヴァイオリンソナタで始めます。クラシック音楽は、聴いていて気持いい曲と奏いたら気持いい曲に分けられると思いますが、私のバッハは明らかに後者です。人の演奏は聴きたくありません。ブランデンブルグや、オーケストラ組曲にしても奏いていると面白いのに、聴くと「うるさい」と感じてしまうのです。

私が学生時代に聴いた「マタイ受難曲」は、平均律にも成り得てない音程の悪い二つのオーケストラの騒音と、やたら声を張り上げるだけの歌で、実にうるさい曲だと拒否していました。しかし最近、Naxos から出た「マタイ受難曲、Naxos8.557617～9」はとても古楽的に音程よく、けっこう純正律的な響きのするいい曲だなあと、再発見しました。でも全体的に、バッハを聴きたいとはあまり思いません。ベートーヴェンはというと、象徴的な「第九」を私はどうしても好きになれないのです。堅苦しく肩肘張った 3 楽章までの音楽を 4 楽章では否定してしまうのです。今までのは音楽じゃない、と言って歌うのは、丸で幼稚園の園歌のような押しつけがましい童謡です。私は 40 年あまり前、東京交響楽団の団員でしたが、いつもいつものベートーヴェンにアレルギーになり、やめてしまいました。特に第九の 3 楽章では奏きながら眠ってしまったことも何回かあります。またブラームスの鈍重で気の晴れないオーケストレーションを演奏すると、必ず暗い気分になったものです。

ここで敢えてみなさんに訊いてみましょう。あなたは本当に 3 大 B が好きなんですか? 例えばベートーヴェンなら「運命」や「第九」の四楽章の勝利の解放感がたまらないと答える人も多いでしょう。でもそこに辿りつくまでの 3 楽章の存在はいったい何なのでしょう。「運命」の 4 楽章だけ単独で演奏すると、まるで陳腐なマーチです。私は学生時代やオーケストラ時代、「ベートーヴェンのどこがいいんだろう? 」と言うと必ずみんな変な顔をして私から遠去かりました。

それにつけても私が驚くのは、世の中のクラシック入門系の本の数です。「第九の聴き方」「交響曲とは」といった本はゴマンとあるのですが、「ベートーヴェンのどこがいいのか」とか「第九って面白いのか」といった本はお眼にかかったことはありません。この類いの何の疑いもなく、3 大 B にひれ伏す風潮が、大いなる眼隠しになり、アスファルトやコンクリートの蓋の役目をし、ドイツ系以外の音楽を埋没させてしまうのです。

＊ドイツの現況

クラシック音楽史の流れを知ると、ドイツは圧倒的に音楽後進国でした。ベートーヴェン以前の音楽の主流はイタリア・フランスのオペラとバレーでした。ベートーヴェン時代でもドイツは統一されておらず、フランス・イタリアを追い越すため、ドイツは器楽曲を発達させ、交響曲的なオーケストラ作品に芸術

性を持たせる努力をしました。「音楽に国境なし」という言葉は、まさにドイツ器楽曲のためにあるわけで、オペラのように国によって違う言語で歌われる分野は明らかに国境があります。音楽を時の権力と対決するような意思(たとえば「英雄」)を持たせる動きはベートーヴェンに顕著で、それをきっかけに、交響曲系の音楽は段々哲学化して行きます。しかし、ベートーヴェンとほぼ同時代のロッシーニのオペラはヨーロッパを席巻し、ベートーヴェンの 1 曲だけのオペラ「フィデリオ」はいつまでたっても成功せず、ベートーヴェンは序曲を何回も書き直しています。ですからロッシーニの成功をねたんだベートーヴェン派は、ロッシーニに対する悪意をむき出しにし、それはシューマンにも引きつがれています。

このシューマンからブラームスに連ながる「絶対音楽」(音楽以外の文学的テーマや描写を排除し、音楽内容を絶対視する)運動が、音楽で哲学する風潮を生み、どんどんドイツ音楽は暗くなっていったのです。そういう風潮のアンチテーゼとしてオペラ(楽劇)の巨人ワグナーがいますが、日本ではいまいち人気がないし、重苦しいことに変わりはありません。そんなワグナーも現代のドイツではいまいちのようです。桐朋学園の O 教授と話していて、面白いことを聞きました。O さんがドイツにいたころ、夜、ワグナーを観るため出かけようとするとドイツ人からどこへ行くのだと訊かれ、「ワグナー」と答えると、「そんなの、どこが面白いんだ」と怪訝そうな顔をされたそうです。

話は一挙に現代に飛びますかが、ドイツの現況は明らかにクラシックに不利です。少し前、ハンブルグでは CD ショップが激減したそうだとか、クラシック・オーケストラがどんどん解散に追い込まれているという話が伝わってきました。また音楽大学にドイツ人は殆んどおらず、アジア系、ラテンアメリカ系が多く、白人にしてもスラブ系ばかりだそうです。

そういう風潮はすでに 30 年以上前からありました。ドイツからあるロックバンドが来日したとき、その頃の「朝日ジャーナル」のある記者さん、バンドの女性ヴォーカリストの名がブラームスとあるので、もしやと思い調べてみると、やはりあのブラームスの血縁でした。そこで記者はブラームス嬢をたずね、血縁の大ブラームスのことを訊くと、そんな人知らないし、私クラシックに興味ない、というので記者は、ブラームスが世界的にどれほど有名で尊敬されているかということを説明すると、ブラームス嬢「わかった調べてみる」と言ったそうです。で、後日会ってみると「確かにあの作曲家は私の血縁関係。それは嬉しいんだけど、曲を聴いても少しも面白くない」と言われたそうです。ドイツ人にさえ、ドイツクラシックは嫌われているんでしょうか。音楽を暗くしてしまったツケでもあるわけですが。

*富国強兵によるドイツ一辺倒の文化教育

戊辰戦争を始めとする幕末の内戦は、実は背後にいたイギリスとフランスの代理戦争で、ドイツは介入していませんでした。従って明治政府の文明開化はイギリスとフランスに学び、追いつこうというのが目標でした。しかし同時に政府は不平等条約に悩んでいましたが、当時はドイツには関心がありませんでした。ヨーロッパの後進国で、野蛮なイナカッペだとしか思っていなかったのです。しかし、尊敬し、目標にしていたフランスが短時間のうちに普仏戦争に破れ、ドイツが一挙に台頭しました。これに心底びっくり仰天した明治政府は、

あわててビスマルクのもとに使者(伊藤博文たち)を送り、フランスに勝った秘密をさぐろうとしました。その時ビスマルクが言ったのは、「とにかくまず、富国強兵だ」とのこと。使者は、不平等条約の悩みも伝え、各国の改善するとの文書を見せ、全く進展がないとこぼしました。するとビスマルク、そんな紙切れ今すぐに破いて捨てちまえ、何の役にも立たん。それより急務は「富国強兵だ」との言葉にいたく感激し、ヨーロッパの後進国だったドイツ(当時はプロシャ)に一挙に傾斜し、すべての制度、文化をドイツ流に変えたのです。

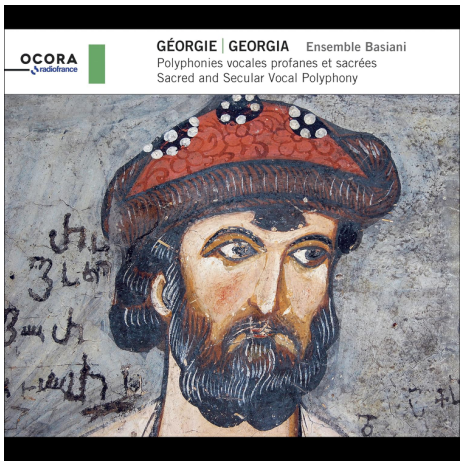
その結果、戦前まで音楽、文学を始めとする文化系はドイツ一辺倒でした。特に音楽に関しては、絶対音楽で確立されたドイツ系音楽が深く音楽教育に反映し、旧制一高の知的ファッションは、シューベルトの「菩提樹」を原語でうたうことでした。絵画の世界は戦前からフランスの影響が強くなりクラシックの世界は戦後、パリへの留学が一挙に増えましたが結局、義務教育では 3 大 B が堂々と生き残ってしまいました。

いまや日本人のドイツ語熱はさめきって、最近までドイツ語を使っていた医学の世界でもドイツ離れしました。それにくらべ音楽の保守性は驚くべきで、未だにドイツ一辺倒です。これはあきらかに時代錯誤だと思います。

CD レビュー純正茶寮

『Georgia Sacred and Secular VocalPolyphony』

純正律音楽研究会理事　黒木朋興



Ensemble Basiani

『Georgia Sacred and Secular Vocal Polyphony』

ASIN　：　B0C2JC8RV5

レーベル：Ocora France

かつてグルジアと呼ばれ、現在ジョージアとなった国に伝わる聖歌や俗謡のポリフォニー曲集である。西洋の古い時代の聖歌といえば単線音楽であるグレゴリオ聖歌が有名だ。対して、ブルガリアンヴォイスやコルシカの合唱は、ヨーロッパに古くからあるポリフォニー音楽としてマニアの間で愛聴されてきた

ように思う。このアルバムのおかげで、ジョージアにも古くからポリフォニーがあったことを知り、世界には本当にいろいろな文化があるなぁと感心する。

正確に言うと、ジョージアは西洋とは言い難い。ただ、ジョージア正教というキリスト教の信者が多い土地で、石造の教会があることからポリフォニーが発達したのだろう。ジョージア人と言えば、ゴルバチョフの腹心だったシュワルナゼや独裁者として有名なスターリンなどがいることを言添えておく。

このアルバムの楽曲の特徴としては、まず、裏声＝ファルセットを使って音高を上下させるスイスのヨーデルのような唱法が挙げられる。人の声というのは最も基本的な音楽の手段だが、単純なようで実に奥深い。また、もちろんポリフォニーだけあって、対位法も使われているのだが、1曲目や4曲目にみられるように、音を動かさずに同じ音の高さで歌詞を歌い、それに4度や5度にハモらせたやはり同じ音の高さの他の声部を重ねていくという楽曲に興味を惹かれた。やはり歌詞のメッセージを伝えることに重きを置いているのだろうか？

なお、ジョージア語というのは、ヨーロッパのバスク語と並んで、他に同じような種類のない独立した言葉であることを言い添えておく。例えば、フランス語やイタリア語はラテン語から派生した同系統の言語であるが、ジョージア語とバスク語は他に親戚関係にあると言える同系統の言葉がない独立した言葉なのだ。ジョージア語とバスク語は似ているという人もいるが、言語学者に聞くとどうやら別系統の言葉のようである。

タンゴの魅力

NPO法人 純正律音楽研究会
正会員　弁護士　齋藤昌男

目次

第１、　序
第２、　タンゴの起源
第３、　楽器の変遷
第４、　バンドネオンの登場
第５、　コンチネンタル・タンゴの誕生
第６、　ピアソラの新しいタンゴ
第７、　ブエノスアイレス訪問記
第８、　タンゴ界の巨匠達
第９、　是非聴いていただきたいタンゴの名曲10曲選
第１０、　参考文献

記

第１、　序

今から50年以上前のことであります。文京区の図書館に潜って勉強していた時代のことです。ある夜、図書館の行事として、タンゴ評論家の高山正彦氏がタンゴのレコード・コンサートを開くということなので、

出席してみました。高山正彦氏の言った事の中で一つだけ明確に覚えている事があります。タンゴの 90 パーセントは、西欧音楽であるが、10 パーセントは西洋音楽にないものを含んでおり、それが魅力だと言う。今回その魅力を探ってみたいと思います。

第２、　タンゴの起源(10 パーセントの西洋音楽にないものの中身は何か)

1、 生明俊雄著「タンゴと日本人」(集英社新書)の 21 ページには、次の記述があります。「タンゴには誕生の原点として 3 つのリズムがある。それは父親とも言えるハバネラ、母親とも言えるカンドンベ、そしてそのような両親から、タンゴより少し先に生まれていた、兄貴ミロンがである。この 3 つのリズムの相互関係、そしてそこからタンゴが生まれた経緯を確認していく。」

2、 キューバから渡って来た父親ハバネラ

1800 年代の前半の頃、アルゼンチンのブエノスアイレスを流れるラプラタ川の河口あたりの港町や、その対岸のウルグアイのモンテビデオの下町には、安っぽい居酒屋やカフェが多数ありました。そこは港に停泊する船の船員達や、港で働く移民の労働者達のたまり場となっておりました。いつの頃からかこの辺りでは、キューバの水夫達が運んできたハバネラと言う音楽が人気となりました。ハバネラは、キューバの首府ハバナの音楽です。ハバネラの源流は、19 世紀初めのイギリスで生まれたカントリー・ダンスという舞曲とされます。

3. アフリカの黒人が連れてきた母親カンドンベ

カンドンベはアフリカから南米に奴隷として連れてこられた黒人達が持ち込んだ、アフリカの宗教の儀式やそれに伴う後進の音楽であります。ラプラタ川の流域には、アフリカからバントゥ族を中心とする黒人奴隷が大勢送られてきました。使われる打楽器も大きな音を出すので、不健全で騒々しいとして取り締まりの対象となる事もありました。しかし 1842 年奴隷解放の法律が制定されると、カンドンベは盛り上がりを見せました。

4. 兄ミロンガの誕生

タンゴのリズムはハバネラとカンドンベを両親として生まれることになりますが、タンゴが生まれる直前にこの両親からミロンガという音楽が生まれています。つまりタンゴにはミロンガという兄がいます。ミロンガは、2 種類あります。リズム・パターンは、同じですがテンポが違います。

(1) 田舎のミロンガ(ミロンガ・カンペーラ)、または草原のミロンガ(ミロンガ・カンペアーナ)と呼ばれています。都会を離れた草原地帯パンパで発展し、アルゼンチンのフォルクローレの代表的なジャンルです。ユパンキの代表作「牛車に揺られて」は、その典型です。

(2) もう一つのミロンガは、テンポの速いミロンガで、街のミロンガ(ミロンガ・シウダーナ)と呼ばれます。タンゴ・ミロンガと呼ばれるものに、「エル・チョクロ」(題名はスペイン語でトウモロコシですが、トウモロコシの様な頭をした男と言う意味で

しょう。)、「エル・エントレリアーノ(エントレリオスの男)」、「ラ・モローチャ」等があります。

5. ミロンガの弟タンゴが誕生
1900 年代になってしばらくは、ミロンガとタンゴは区別のはっきりしない状態にありました。しかし、タンゴのリズムに変化が生まれました。4 拍子のタンゴのリズムが現れたのです。「チャ・チャ」と言う 2 拍子のミロンガのリズムに対して、「チャ・チャ・チャ・チャ」と言う 4 拍子のタンゴのリズムです。4 拍子はヨーロッパ生まれのマーチ(行進曲)と同じリズムです。

第３、　楽器の変遷

1、　19 世紀末が近づく頃、ヴエノスアイレスの場末のボカ、バレルモ、ベルグラーノなどの港町で新しい踊りであるタンゴは踊られていました。演奏する楽器の構成は、フルート、ギター、ヴァイオリンと言うトリオが多かったそうです。フルートが、メロディーを担当し、ギターはリズムを刻む役割で、ヴァイオリンは、フルートをサポートする立場にありました。

2、　フルートが主役を務めた理由は色々と考えられますが、管楽器であるフルートの息使いは、人間の息使いそのものであり、生々しい人の鼓動が感じられます。フルートが奏る高い音は、人の心を浮き立たせました。明るいフルートの音色は、飛び跳ねるようなミロンガのリズムとの相性もよかったのでしょう。

3. 1890 年代に入った頃のことでありますが、ブエノスアイレスには店内にピアノを置く、金持ち相手のクラブが相次いで開店しました。ピアニストの登場により、曲が楽譜として残されるようになりました。楽譜が出版されるようになり、タンゴが一般家庭でもピアノで演奏される様になりました。これまで下層階級の労働者のいかがわしい音楽であったタンゴが、健全な市民の音楽になってゆきました。これはタンゴがピアノで演奏されるようになったことによる大きな変化でした。

第４、　バンドネオンの登場

1、バンドネオンがドイツからアルゼンチンへ持ち込まれたのはいつ頃なのか誰がどの様なきっかけで持ち込んだのか、明確にはできません。1890 年頃にアルゼンチンに持ち込まれ、1900 年頃からタンゴの楽器として使われ始め、1910 年あたりになるとタンゴになくてはならない楽器となりました。このことからピアノがタンゴ・バンドに加入してきた時期は、ほぼ同じと言うことになります。ピアノの登場でリズム楽器のギターがバンドから消えましたが、バンドネオンの出現でメロディー楽器のフルートが消えることになりました。

2、バンドネオンは、アコーディオンの仲間で、ドイツで発明されました。オルガンのない場所で教会音楽を演奏するために、考案されたと言われております。合唱を支えるため、メロディーよりも和音を弾くのに適した、音階順ではないボタン(ピアノの鍵盤に当たる)配列がされています。蛇腹の開閉で空気が流れ、合金でできたリード(舌)が震えて音が出ます。

3、現在バンドネオンは、ドイツなどのヨーロッパの一部とアルゼンチンの

北西部で、地方舞曲やフォルクローレを弾くほかは、殆どタンゴの演奏に使われています。バンドネオンの深みのある、メランコリックな音色は、正にタンゴのためのものです。リズムは単純な 2 拍子ではなく、より表情豊かな 4 拍子になりました。その上、バンドネオンの魅力は、センチメンタルな音色だけではなく、その独特な演奏技法もタンゴに新しい魅力をもたらしました。それは歯切れの良いスタッカート技法と、曲芸弾きの 1 種とも言えるバリエーション技法です。バリエーションと言う演奏技法とは、オリジナルのメロディーを 16 音符に崩して、即興的に演奏する「速弾き」技法です。この奏法はヴァイオリンやピアノでも可能ですが、バンドネオンが弾くことによって華麗さが強調されタンゴの魅力となりました。

4、では何故にバンドネオンが、タンゴに使われる様になったのでしょうか。この楽器には、他のジャンルの手垢がついていません。ドイツ、オーストリア、東欧などの労働者の間で限られた範囲のブームになっているらしいが、確固たるホームを持っているわけではありませんでした。それならばタンゴの顔役になってもらうと考えたのでないでしょうか。

5、専門的で恐縮ですが、蛇腹楽器の世界では、「押し引き同音」の楽器は「ユニソニック式」、「押し引き異音」の楽器は「バイソニック」と呼んでいます。しかし、日本では、前者を「クロマティック式(半音階式)」、後者を「ディアトニック式(金音階式)」と呼ぶことが習慣となっております。

第５、 コンチネンタル・タンゴの誕生

1、 タンゴは、20 世紀に入るとフランスのパリに進出します。その頃のパリの社交界ではウィンナ・ワルツ、ポルカ、マズルカなどの東ヨーロッパから来た上品なダンスが踊られていました。新しいもの好きなパリの人々はタンゴに飛びつきました。1928 年あたりが、ヨーロッパのタンゴ・ブームの絶頂期です。

2、 後に日本で「コンチネンタル・タンゴ」と呼ばれることになりますが、アルゼンチンとウルグアイのスタイルを洗練させた、ヨーロッパならではのタンゴの表現が生まれたのも 1920 年代です。

3、 この時期にヨーロッパで生まれ今でも演奏される音楽には、フランスでは「夢のタンゴ」「小雨降る径」、ドイツでは「碧空」「夜のタンゴ」「モンテカルロの一夜」「奥様お手をどうぞ」など、イタリアでは「バラのタンゴ」、デンマークでは「ジェラシー」、オランダでは「オレ・グァッパ」などがあります。これらはドイツのアルフレッド・ハウゼ楽団やリカルド・サントス楽団、オランダのマランド楽団などの演奏で世界中に広まりました。

第６、 ピアソラの新しいタンゴ

1、アストル・ピアソラは、1921 年にイタリア系 2 世の両親の元に、アルゼンチンのマル・デル・プラタ市で生まれました。一家はアストルが 4 歳の時、ニューヨークへ移住しました。父親は大のタンゴ・ファンでした。15 歳でマル・デル・プラタに戻り、18 歳でブエノスアイレスに上京し、当時最高の音楽水準を持っていたアニマル・トロイロ楽団のバンドネオン奏者となり、その後編曲も担当します。

2、1946 年には、独自のオルケスタ・ティピカを結成しますが、1949 年に解散し、1954 年にはタンゴと縁を切り、パリ音楽院でクラシック音楽を学び、1955 年に帰国して、8 重奏団を結成します。世間からは「タンゴ伝統の破壊者」とまで呼ばれました。

3、1958 年にニューヨークに移住しました。1960 年にはブエノスアイレスに戻りました。1969 年に「ロコへのバラード」が大ヒットとなりました。

4、1990 年、教会のミサに行こうとパリの自宅を出たところで脳溢血で倒れ、意識が戻らないまま、1992 年ブエノスアイレスの病院でなくなりました。

第７、　ブエノスアイレス訪問記

1、　1985 年の暮れから 1986 年にかけて、南米を訪れた事があります。高等学校の同級生の小原君の弟が、リオデジャネイロで成功していると言う事で、そこを拠点として、ブラジル、アルゼンチン、チリを訪問しました。その時にブエノスアイレスに 2 泊しました。

2、　アルゼンチンは、日本のおよそ 7.5 倍の国土面積があります。首都のブエノスアイレスは、大西洋に注ぐラプラタ川の西岸に位置し、対岸はウルグアイのモンテビデオです。「ラ・プラタ」とは、「銀」を意味します。

3、　ボカ地区(La Boca)

ボカは、ラプラタ川の支流の一つであるリアチュエロ川の河口に作られた港で、現在はよどんだ水を湛える廃港です。ここは多くの移民がたどり着いた新大陸の入り口でした。1910 年代、到着してまもない移民の住まいを確保するために、「コンベンティージョ」と言う共同住宅が建設されました。如何にも仮の住まいと言った 2 階建ての質素木造住宅ですが、ボカ地区の小路「カミニート」には残っています。「カミニート」は、明らかに鉄道の引込線の跡です。

4、　セントロ(センター)地区

市の中心部で、スペイン人が建設した街の起点が、プラサ・デ・マジョ(5 月広場)です。広場に面して建つのが、通称カサ・ロサーダ(ホアイトハウスならぬ、ピンクハウス)と呼ばれる大統領府です。同じ大通りには、ミラノのスカラ座、パリのオペラ座と並び「世界 3 大劇場」の一つと称される、コロン劇場があります。若き日のトスカニーニが、ここのオーケストラでチェロを弾いていました。市内には、トスカニーニ通りもあります。

5、　サンテルモ地区(San Telmo)

タンゴの生演奏なら夜のこの地区です。ブエノスアイレスには、2 日しか滞在しませんでしたが、夜はこの地区を、徘徊しました。一月の南米は、夏なので、上着を持っていかなかったので、ホテルのフロントに言われて、上着を用意しました。しかし、踊る人は、なるほど正装していました。しかし、観客は、そうではありませんでした。ここでの一番の印象は、劇場の演奏と違って、どこの店も大変力強い演奏でした。ピアノは、どこも殆ど立って弾いていました。

第８、　タンゴ界の巨匠達

アストル・ピアソラについては、既に触れましたので、その他の巨匠達について、触れておきたいと思います。

1、 カルロス、ガルデル(Carlos Gardel)(1887年～1935年)
タンゴにおける歌の表現を完成させた人と言われています。1935年6月24日、コロンビアのメデジン空港で、乗っていた小型機が墜落し、全員が焼死しました。カルデルは、推定48歳でした。

2、 ファン・ダリエソン(Juan D’Arienzo)(1901年～1976年)
「リズムの王様」という称号を持つ人です。本人は「タンゴの3要素は、コンパスと効果音と強弱の表情だ」と断言しています。コンパスとは、スペイン語でリズムのことで、揺るがないビート、拍動のことです。

3、 アニバル・トロイロ(Anibal Troilo)(1914年～1975年)
彼は、正規な音楽教育は全く受けていませんが、なんでも弾けた天才でした。難しいところは、トロイロに弾いてもらおうと、業界では有名でした。

4、 オスバルト・プグリェーセ(Osvaldo Puglicse)(1905年～1995年)
タンゴの一つの表現スタイルの創始者です。所謂「ジュンバ」のリズムです。ピアノ、コントラバス、バンドネオンが一体となって、「ジュン・バ、ジュン・バ」と、4拍で、どこまでも押し切っていきます。

5、 アルフレッド・ハウゼ(Alfred Hause)(1921年～2005年)
コンチネンタル・タンゴの第一人者です。ドイツ中西部生まれで、ヴァイマール音楽院で学びました。ヨーロッパで絶大な人気があったタンゴのダンスと音楽は、第二次世界大戦後には、ほとんど忘れられていましたが、それを復活させたのは、この人です。

6、 マランド(Malando)(1908年～1980年)
オランダは小さな国ですが、ポピュラー音楽の世界で有名となったのは、マランドと、現在全世界で活躍しているアンドレ・リユ(Andre Rieu)がいます。

第９、是非聞いていただきたいタンゴの名曲紹介10曲選

1、ラ・クンパルシータ
全世界24時間この曲が演奏されて無い時は無いと、言われているほど、この曲は有名です。実はこの曲は、アルゼンチン生まれではなく、ラプラタ川対岸のウルグアイのモンテビデオで生まれたものです。クンパルシータとは、どんな意味かとスペイン語の辞書をひいて見ましたが、出ていませんでした。お祭りの行列の意味であると、どこかで読んだ事がありました。ユーキャン発行の「世界タンゴ大全集」によれば、題名は「カーニバルの小さなパレード・グループ」の意味と出ています。1916年初演。

2、エル・チョクロ
題名はスペイン語でとうもろこしのことです。とうもろこしの様な頭をした男と理解していました。前記のユーキャン発行の「世界のタンゴ大全集」によれば、作曲家は、肉と野菜のごった煮シチューが好きで、特に芯付きで輪切りにしたとうもろこしが一番の好物だったので、自分の一番好きなタンゴにこの名前を付けたそうです。1903年のヒッ

ト曲です。

3、たそがれのオルガニート

夕暮れの街を行くオルガニート(オルゴール車)を主題にした曲です。非常に美しいメロディーを持つ曲で、特に第１主題は印象的です。1924年の第１回タンゴ作曲コンクールで第３位となった作品です。

4、淡き光に

作曲者は、エドガルド・ドナート(1897年～1963年)で、彼は、ヴァイオリン奏者でもありました。彼は、ブエノスアイレス生まれで、2才の時にモンテビデオへ写り、ウルグアイのタンゴ界でプロデビューしブエノスアイレスに帰って大活躍しました。この曲は1926年発表ですが、タンゴのベスト・スリーに入ると言う人もいます。

5、カミニート

タイトルは「小道」のことで、作曲者はフイルベルト(1885年～1964年)で、1926年の作品で、この曲は、廃線になった貨物列車の跡地の淋しい小道を、夜更けに通る恋人たちのイメージだと、作者自身は語っているそうです。ブエノスアイレスのボカ地区に、この小道は現存します。

6、さらば草原よ

1945年のスーパー・ヒット曲で、今日まで最も人気のあるタンゴの一つです。同年、ブエノスアイレスで上演されたミュージカル・コメディー「パリのタンゴ」の挿入歌です。コメディーは、パリに流れて行ったアルゼンチン人アーティストの物語で、異国で故郷を懐かしく思い出すシーンで、この曲が歌われました。上演当時から、コメディーよりも、この曲のほうが人気となりました。

7、パリのカナロ

フランシスコ・カナロは、楽団を率いて1925年パリに遠征しました。大成功しますが、それを記念して作曲された曲です。あくまで私見ですが、せり上がってゆく旋律、またせり下がってゆく旋律は、何とも言えません。

8、碧空

タイトルは、「あおぞら」と読みます。「青空」と当用漢字で書くとピンと来ないでしょう。1936年に発表された作品で、「ジェラシー」と並ぶコンチネンタル・タンゴの最高傑作です。

9、ジェラシー

ヨーロッパ製のタンゴの中で、もっとも演奏されている曲のベスト5に入ると言われています。作曲者はデンマークの人。1925年に映画「怪傑ゾロ」シリーズのバックグラウンド音楽として、この曲が作曲演奏され、大きな評判となりました。

10、小雨降る径

この曲の作曲者ヘンリー・ヒンメル(1910年～1996年)は、オーストリア出身ですが、ユダヤ人であったため、パリに逃れて、そこで音楽活動を成功させました。この曲の魅力は、あくまで私見ですが、小雨の降る都会の径の雰囲気が出ているところでしょう。

第10、参考文献

1、生明俊雄著「タンゴと日本人」集英社新書
2、株式会社ユーキャン発行「世界タンゴ大全集」
3、小松亮太著「タンゴの真実」株式会社旬報社発行
4、ウィキペディア

以上
2024 年 4 月 11 日脱稿

おたより募集！

会報のご感想、ご意見、純正律音楽にまつわること等々、なんでもお寄せ下さい。たくさんのお便りを、お待ちしております。
次号の【ひびきジャーナル】にてご紹介させて頂きたいと思っております。

〒168-0072
東京都新宿区百人町 4-4-16-1218　NPO 法人 純正律音楽研究会
お電話：03-5389-8449　FAX：03-5389-8449
e-mail：puremusic0804@yahoo.co.jp　　http://just-int.com/

2024 年 5 月 10 日　発行責任者： NPO 法人 純正律音楽研究会
編集： 相坂政夫

＊純正律音楽研究会 YouTube チャンネルを開設しました。
コンサートや CD 紹介の映像が当会ホームページからご覧いただけます。
http://just-int.com/